The Japan Lung Cancer Society



佐々野修，柴崎信一，綾部公懿

bcl-2はヒト濾胞性リンパ腫の第14番染色体と第18番染色体の転座から発見されたプロトオンコジーンであるが，現在はアポトーシスを抑制する遺伝子として注目されている．

今回，我々は1991年から1992年まで長崎大学第1外科にて切除された非小細胞肺癌40例のパラフィン包埋切片を用いて免疫組織染色を行い，bcl-2の発現状態とその予後について検討したので報告する．

**60．原発性肺癌患者の血清中CYFRA21-1(シフラ)の検討**

宮崎医大第2外科　前田正幸
久保田伊知郎，清水哲哉
臼間康博，井上正邦，吉岡　誠
松崎泰憲，柴田紘一郎
古賀保範

1994年9月より，1995年4月間の当科における原発性肺癌30例，肺良性疾患8例について検討した．シフラ陽性率は原発性肺癌50%，肺良性疾患0%であり，T因子の進行とともに高くなった($P<0.05$)．腺癌より扁平上皮癌で，病期，n因子の進行とともに陽性率が高くなる傾向にあった．術前陽性例では，術後1ヵ月に全例陰性となり有意に低下した($P<0.01$)．結語：シフラは原発性肺癌の有用な腫瘍マーカーである．

**61．特発性間質性肺炎合併肺癌の検討**

熊本地域医療センター呼吸器内科　深井祐治，瀬戸貴司
千場　博
同　放射線科　吉松俊治
同　外科　稲吉　厚
同　病理　蔵野良一

特発性間質性肺炎(IIP)に肺癌が発生し易いと言われており，最近，報告例も多くみられる．当センターにおいても1982年1月～1994年6月までにIIP合併肺癌10症例を経験した．蜂窩肺との関係をみると，包含及び隣接例が6例あったが，別部位例も4例あり，発癌機序を蜂窩肺に結論ずけれないことも事実と思われる．以前のCT検査で線維化病変内に小結節影がみられたにも拘らず，良性と考え，放置してしまった2症例を経験し，反省させられた．

**62．肺結核と肺癌合併例の臨床的検討**

国療沖縄病院内科　古波蔵紀子
久場睦夫，仲宗根恵俊
宮城　茂，喜屋武邦雄
新里　敬，源河圭一郎

過去4年間に経験した肺結核と肺癌合併例は7例で，肺結核患者733例中0.96%，全肺癌634例中1.1%の頻度であった．全例男性で喫煙指数400以上の重喫煙者であった．両疾患の発見時期については肺結核先行が5例，肺癌先行1例，同時発見が1例であった．肺癌の組織型は扁平上皮癌5例，腺癌2例，病期はⅠ期2例，Ⅳ期5例であった．重喫煙肺結核例は肺癌のhigh risk群といえる．肺結核の発見時及びその後の化療中，化療後とも肺癌の発生を念頭に観察することが重要と思われる．

**63．肺癌におけるGST-piとMetallothioneinの発現**

長崎大第2内科　藤野　了
楢崎史彦，中野令伊司
高谷　洋，岡三喜男，原　耕平

化学療法未施行67例，施行33例の肺癌手術標本を用い，酵素抗体法でGST-piとMetallothionein(MT)の免疫染色を行った．GST-piは，化学療法未施行非小細胞肺癌の80%が陽性．扁平上皮癌は96%，腺癌67%，小細胞肺癌50%に陽性であった．施行小細胞肺癌で72%陽性であった．MTは，未施行非小細胞肺癌で29%，施行非小細胞肺癌で33%陽性であった．獲得耐性への関与はなかった．

**64．気管支カルチノイドの臨床病理学的検討**

長崎大第1外科　劉　中誠
岡　忠之，生田安司，土谷智史
森永真史，新宮　浩，辻　博治
原　信介，田川　泰，綾部公懿

1988年9月から1995年3月までに当科で経験した気管支カルチノイド6例について，臨床病理学的に検討した．男性2例，女性4例．平均年齢は48.7歳であった．3例に肺葉切除，3例に気管支形成術を併用した肺葉切除を施行した．組織型では定型的カルチノイドが4例，非定型例が2例であり，2例に肺門リンパ節転移を認めた．予後は非定型例の1例が対側肺及び肝転移により術後13ヵ月で死亡した．その他は健存中である．

**65．肺癌多発家系の検討**

国療大牟田病院外科
都志見睦生，那須賢司
堀内雅彦

同一家系内に発症した，原発性肺癌3例について若干の考察を加え報告する．1例目は39歳の男性，右上葉の大細胞癌で術後副腎転移にて死亡した．2例目はその従兄で左上葉の扁平上皮癌Stage Ⅰで上葉切除を行い，生存中である．3例目は実父で右上葉腫瘤影で現在入院中である．3例共，それぞれ巨大ブラ，肺気腫，肺線維症と基礎疾患を有するが，子，父，従兄という近い血縁関係にあり，肺癌多発家系と考えられた．

**66．緑茶摂取と肺癌**

NII-Electronic Library Service